文学にみる対比

藤田榮一 著

Mark Twain: The Innocents Abroad (1869)

Henry James: The American (18

Henry James: The Europeans (1878)

Joseph Conrad: Heart of Darkness (1899)

E.M.Forster: A Passage to India (19

Ernest Hemingway: The Sun Also Rises (1926)

米人と異文化への対応

文学をめぐって

藤田榮一 著

著者略歴

1936年生まれ

著書 『生と自由を求めて—ヘンリー・ジェイムズの小説』
「英米文学の鑑賞」(共著)
「英米小説の鑑賞」(共著)
「イギリス小説」(共著)
「アメリカ小説」(共著)
「英米小説と詩」(共著)
(以上、創元社刊)

欧米人と異文化への対応 検印省略

©昭和58年4月10日 第1版第1刷発行

著者 藤田栄一
発行者 矢部文治
印刷所 岩岡印刷株式会社

発行所
株式会社 **創元社**
大阪市北区西天満 1-4-2 郵便番号〔530〕
電話 (06) (363) 2531 (代) 振替大阪 5-57099
東京支店 東京都新宿区山吹町77 郵便番号〔162〕
電話 (03) (269) 1051

ISBN4-422-81026-X Printed in Japan.

目次

異文化への対応をめぐって 3

マーク・トゥウェイン 赤毛布外遊記
Mark Twain: *The Innocents Abroad (1869)* 9

ヘンリー・ジェイムズ アメリカ人
Henry James: *The American (1877)* 33

ヘンリー・ジェイムズ ヨーロッパ人
Henry James: *The Europeans (1878)* 53

ジョゼフ・コンラッド 闇の奥
Joseph Conrad: *Heart of Darkness (1899)* 79

E・M・フォースター インドへの道
E.M. Forster: *A Passage to India (1924)* 109

アーネスト・ヘミングウェイ 陽はまた昇る
Ernest Hemingway: *The Sun Also Rises (1926)* 145

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

異文化への対応をめぐって

外国との接触や交際が頻繁になるにつれて、外国人や外国文化のような異質なものに対して、人がどう感じ、どう考え、どう反応し、どう行動するかという「対応」の仕方が問題になる。異文化への対応しだいで相互理解を実現し、お互いの文化をはなれて新しい理想の文化を生み出すこともできるし、反発と誤解から国際緊張や紛争に陥ることもある。

お互いに異文化を理解し、異質性の壁をのり越えて融合し合おうと望んでいても、障壁をのり越えられず、カルチャーショックの深淵に落ちこむこともある。お互いがどの程度まで自己の文化に特有の偏狭な価値観にとらわれず、偏見を捨て、事実を直視することによって異文化の長短と自己の文化の得失を冷静に比較し、検討し、その中から理想的な果実を導き出すことができるかということが問題である。そのためには、異文化と接したときにどう考え、どう行動すべきかという意識を常にみずからに投げかけ、異文化との接触から生じる問題の解決をみずからに課さなければならない。

欧米人はわれわれより、異文化との接触について歴史的にみてはるかに豊富な体験をもっている。欧米人が異文化に接し、どう対応したかを分析し検討してみることは充分に意義あることである。われわれの中にある偏見や誤った知識やかたよった物の見方という「敵」を知り、それを乗り越えようとする「己れ」を知ることはいかにして異文化と対応すべきかという課題の解決のためには必要である。

異文化との対応という問題においては、まずどのような態度で接するかということが最初に問われるだろう。異文化と接するにあたって先入観や偏見を捨て、ありのままを直視しようという態度でそれに接しているかどうか。もちろん特有の感じ方や考え方は自己の文化によって生き、その「虜」となっている人間にとって、生きてきた根拠として捨て去れるものではない。しかし自己のアイデンティティを残しながら、どの程度まで曇りのない眼で異文化に接することができるかが大いに問題になる。自己の文化に埋没し、それに固執するあまり、それと異質のものはかたくなに拒んだり、偏見的に見下したり、無視したりしていたのでは、異文化間の相互理解や融合はとうてい達成できるものではない。といって自己の文化に拠りどころを求めず、自己のアイデンティティを捨て、それを堅持することを放棄すれば、国際的な「根なし草」のような頼りのない存在と化してしまう。あくまでも自己の生きる姿勢を支える「根底」として自己の文化に対し誇りをもってそれを堅持しなければならない。その欠点に対しては、それを自覚し、是正しようと努め、異文化の長所は積極的にそれを認め受け入れようとする姿勢を保つことが重要なのである。その反対に異文化にどう考えても問題があり、それを是正することによって相互に利益がもたらされることが明らかなときに、その努力を放棄することは正しい対応であるとはいえない。

つぎに異文化と接してどう反応するかということが問題になる。外国の人や風物やさまざまな風俗習慣や文化遺産などに接し、素直に感動できるかどうか、また単に感動するだけでなく、それを自己の体験の中でどう位置づけ、どう評価し、どう意味づけ、どう解釈するかということによって、同じ異文化との接触でも全く異なった反応が生じる。人は誰でも自分の文化より伝統があり進んだ異文化に接すると、それを理解し、その良さを認め高く評価し価値づけようとする。すなわちそれを謙虚な態度で自国文化と比較検討し素直に受け入れようとする。それが人間の自然な反応である。

ところが自国の文化より貧しく見劣りのする文化に対しては、それを見くだして頭から軽蔑したり無視したりすることが多い。これは人間として当然の本能的反応といえるかもしれない。しかしこの人間的な本能に身をゆだねていると、偏見に捉われて異文化の本質を見誤り、誤解の原因になりかねない。自己の文化特有の観点から何の取り柄もないと判断した文化であっても、それは長い歴史と伝統に培われて必然的に生まれてきたものであり、相手の考え方や立場からすれば、そうあらざるを得ないのが文化である。このことを理解しない限り異文化に対する正しい反応はあり得ない。

異文化に接したとき、人は往々にして悪意にみちた虚偽や策略や詐欺的な行為にさらされることがある。このようなときにどう反応するかということも、問題の一つである。外国人が仕かけてきたさまざまな罠にかかってだまされることはより無垢な文化にある人が経験する事態である。その罠を仕かけられたとき、それを見抜いて真正面から対抗し、知恵と力でそれを粉砕することもできる。しかし往々にしてそれはいっそう激しい紛争の火種になりかねない。このような危機に際し、どう対応するかということも異文化間の接触における重要な問題である。相手と真正面から争うことを避け、しかも相手の仕かけた罠を巧みに逃れ、その悪意から身をかわし、できることなら相手にその非を認め

させて自分の望むような事態に導くことができれば理想的である。しかし異文化間の対応では、それは自国内におけるよりもはるかに困難である。たとえ相手に悪意がない場合でも、異文化間にあっては相手に何らかの行為をさせようとしたり、説得をしようとすれば、相手の文化に自分の態度を近づけたり、融合したりすることによって、相手が自分またはその文化を受け入れ易い形に変容したうえで行動を起こす必要がある。相手の文化を理解し、その文化が称揚する規範にあわせて相手を説得するような形をとらなければ、どんな説得も交渉も成功を収めることはむずかしい。このことをどの程度まで理解し実現しているかということも見逃がしてはならない問題である。

言語は、異文化体験において外国人との交際や接触を実際におしすすめてゆく最も基本的な手段である。それとともに外国の言語を操作することは困難をともなうものである。誰にとっても自国語でない言語をあやつり、十分に相手とコミュニケートすることはむずかしい。この困難をどの程度克服して外国人と十分な意思疎通を計り相互理解を実現したり、相手に自己の望むところを説いて正しい反応を導き出し、相手から意図した成果を得たり、与えたりできているかということが問題になる。相手への意思の伝達も相手への称讃も、批判も、理解も、すべてこの言語という手段を通じて行なわれる。言語をどの程度まで有効に使いこなしているか、言語の使い方によって誤解や反発が生じているかということが問題になる。

異文化との接触による結果は、接する密度や時間によっても当然違ってくる。その対応もこれらの条件によって影響を受けざるを得ない。短期の旅行者が受ける異文化の印象やそれに対する感じ方と、長期の滞在者の異文化体験では、その深さや豊かさという点で大いに違わざるを得ないだろう。最初の段階の表面的な接触では好意的な印象をいだいていても、長く滞在するうちに、それが誤っている

ことがわかったり、異文化の長短が自己の文化との比較から意識されるような場合もある。もちろん同じ異文化との接触が深く長いほど、それに対して好意的になることもあり、むしろその方が普通であろう。しかしいかに長く異文化に接しても旅行者は旅行者であって、その体験には限界があることも事実である。異文化に根を下ろして定住してみると、外部からはうかがい知れなかった異文化特有の社会的規範や価値観や表面から隠された風俗習慣などが目に見えてくる。それらもろもろの文化と自己の文化――その価値観や規範との対立や衝突にしだいに悩まされるような事態が生じるかもしれない。それとは逆に、異文化と自己の文化がうまく溶け合い融合が実現され、そのことから新しいより理想的な文化が生まれるかもしれない。この融合による、より優れた文化が生まれるという事態こそは、異文化との接触によってわれわれが目ざすべき一つの目標である。しかしそれが非常に困難であることも事実である。異文化と完全に溶け込み、しかも自己の文化から得たアイデンティティを失わないところに新しい国際的な文化の創造が実現できる可能性がある。

異文化と接し、その結果生じる反応は、すべて自己の文化によって培われた価値観を根拠として生じるものである。異文化から生じた事物や現象が良いとか悪いとか快いとか不快という感じ方自体がすでに自己の文化の価値観の支配を受けているし、その結果生じる具体的な反応としての行動も自分のいだいている価値観にもとづいて生まれてくる。自己の文化から生じた価値観と異文化にある価値観が接することから生じる微妙なずれや対立から、誤解や反感や対立や紛争などがもたらされることもある。その反対に理解や共感や融合というものももちろん生まれる可能性はあるが、それらは意識的で積極的な努力によってはじめてもたらされるものであり、積極的な努力なくして自然に与えられるものではない。

自己の価値観にとらわれて異文化に接し、感じ、判断することは、たしかに異文化に対する確固とした基準をもってそれに対することにはなるが、一面それに支配される危険をもそなえている。その反面、もし確固たる価値観が確立されていなければ、異文化に接しても何を感じ、どう判断し、どう行動すればよいかという基準がないために一種の不安にかられた混乱に陥いることも事実である。それは自己のアイデンティティを失った混乱した状態だと言えるだろう。その逆にあるものは自己の価値観に固執し、それが容認するもの以外は全く受け入れないという態度である。これらをどう調和させ、異文化の障壁を克服し異文化と円滑に対応してゆくかということが、現代人に課せられた課題となる。

異文化との接触という体験を適切に生かし、それを誤解や反感や紛争というマイナスではなく、新しい理想の文化を生み出すための糧とするためには、われわれの体験のみでなく、より長く豊富な異文化体験をもつ欧米人のそれを知ることからはじめなくてはならない。ここに述べた異文化への対応に付随して生じるさまざまの問題を予備知識のひとつとして英米文学にあらわされた欧米人の異文化との接触とその反応の実態を見てみることにしよう。その具体的で示唆にとむ記録は、豊かな果実を提供してくれる可能性がある。それをどの程度まで汲みとることができるか——それはわれわれの異文化への対応についての姿勢とそれを生かそうという熱意にかかっている。その方法がたとえ未熟なものであっても、まずそれにとりかかる以外に途はない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マーク・トゥウェイン　赤毛布外遊記

Mark Twain: *The Innocents Abroad (1869)*

マーク・トゥウェインは一八六七年、三十二歳のときに、デェイリー・アルタ・カリフォルニア紙の特派員として、六十数名からなるヨーロッパ旅行団に加わった。この旅行団は五ヵ月にわたって、アゾール諸島からジブラルタル海峡を経てマルセイユ、パリ、ヴェニスなどの諸都市、アテネ、コンスタンチノープル、パレスチナなどを訪れる。

彼がみずから「赤げっと外遊記」と称したように、当時のアメリカはヨーロッパの伝統ある社会と比較すれば無知な田舎者の社会であり、それをみずから揶揄って題名にしているほどである。しかし彼は、アーヴィング、ロングフェロー、エマソン、ホーソンなどの先人とは異なって、ヨーロッパ文明を手放しに無条件の立場から礼讃し、上品な態度に終始して自分たちの無知ぶりを卑下するという姿勢はとらない。彼の異文化体験の特色は、「その観察の新鮮さと解釈の独創性とにあった。彼は先人や他人の眼を借りず、自分自身が見たまま感じたままを、歯にきぬをきせないで述べ、祖先の国の

自然と生活と文化とに、新しいアメリカ的な批判を加えた」[1]ところにある。彼がヨーロッパ的な伝統の「軛」にとらわれず、アメリカ人の固有の価値観と彼独自の観点からヨーロッパの文化に対し率直な判断と評価を下したところに、多少の見当違いはあるにしても、大いに意義がある。

ともすれば自己を卑下し、自己批判に陥りがちな当時のアメリカ文化を大いに称揚し、その良さを再認識し、アメリカ人に誇りを与えたことは、ある意味で自己の文化に対する貢献であった。

その反面、アメリカ人の豊かさや成金趣味から生み出された「拝金思想」にはみずから反省を加え、ヨーロッパ人の娯楽や生活自体を楽しむ余裕ある生活態度をアメリカ人の仕事一辺倒のあくせくした生活と比較し、その良さを率直に認めている。彼はそれを称賛しアメリカ人もそれを見習うべきだと説く冷静さを保っている。彼はヨーロッパ文明の不合理な点については遠慮なく批判しているが、アメリカ人の利己的な欲望や無知ぶりも隠すことなくさらけ出している。これらの点を仔細に検討すれば、彼がみずからの文化に誇りと愛着をもち、その価値観に立ちながら異文化に対しその長短や優劣を曇りない眼で見抜き、アメリカ文化のよさを堅持しようとしていることがわかる。その一方アメリカ文化の足らないところを指摘し、全体としてより望ましい方向に導くことを目ざしている。このことは彼が異文化に接し、どう感じ、どう反応し、どう行動したかということをみれば首肯できるところである。

彼の異文化との接触で特に注意すべきことは、自分が世間知らずで無知であることを隠さず赤裸々に語っていることだ。もし見栄とか体裁でわが身を飾っていたら、これほど率直でユーモアに富んだ異文化体験の記録は生まれなかったであろう。もし自分を偽って自分に都合のよいことだけを語っていたら、彼の体験談の価値は半減しただろう。彼が船に乗り込んで自分なりの無邪気な楽しみにふけ

ろうとして後甲板で葉巻をくゆらせてよい気分になっていると「そんなことをしちゃ困りますな」と注意され、それではと前の方に行って一室にあった備えつけの望遠鏡で覗いていると「触ってはいけません」と頭から禁止される。所在ないままにナイフで欄干に彫刻しているとまたしても「船をすっかり粉々に切り刻むことしか知らないんですか」と訓戒されてやむなく操縦室の六分儀を眼にあてようとしたとたん「あの、それは私にお渡し願いたいもんですな」とことごとく行動をはばまれる。憤慨して抗議しようとした彼はこれらの人物がことごとく船の最高責任者である船長だときいて驚き、すっかり考え込んでしまう。この冒頭のエピソードは彼の異文化に接した驚きを端的に表現したものだ。

彼がこの失敗談を率直に語り、みずからの驚きを綴っていることは、自分の判断から正しいことだと考えたり、間違ったことではないと確信していても、異なった文化をもつ外国では、それがとんでもない思い違いであることを認めたものにほかならない。何事であれ自分の基準や判断が通用しないところに当惑や混乱が生じるのである。この価値基準の逆転はいろいろの場面で示されている。

誰でも経験することだが外国では通貨の基準が異なっていることを知っていないと混乱を招くことになる。彼の旅行団の一行もその点についての無知ぶりを発揮して、ポルトガルの通貨が米ドルと1ドル当り千レイズの交換比率であることを知らなかったばかりにとんでもない誤解を招いてしまった。よい気分で夕食を楽しんでいた連中は差し出された勘定書きの莫大な数字を見て色を失い、怒声を発し、殺気だって立ち上がった。ところがこの恐ろしい紛争の原因は、単なる通貨の基準に対する誤解から生じていることがわかったとき読者を支配する微苦笑は、類似の事態が単なる誤解であることがわからないままで紛争に発展した場合の危険性を想起させないではおかない。一同が殺気だったこの

勘定書きの金額は米ドルではわずか二十一ドル七十セントに過ぎなかったのだ。これを見て幸せな気分がみなぎって料理を食いまくったという連中は物事にこだわらない無邪気な連中だと言うだけではすまない誤解の危険性も暗示してはいないだろうか。

The Portuguese pennies, or reis (pronounced rays), are prodigious. It takes one thousand reis to make a dollar, and all financial estimates are made in reis. We did not know this until after we had found it out through Blucher. Blucher said he was so happy and so grateful to be on solid land once more that he wanted to give a feast — said he had heard it was a cheap land, and he was bound to have a grand banquet. He invited nine of us, and we ate an excellent dinner at the principal hotel. In the midst of the jollity produced by good cigars, good wine, and passable anecdotes, the landlord presented his bill. Blucher glanced at it and his countenance fell. He took another look to assure himself that his senses had not deceived him and then read the items aloud, in a faltering voice, while the roses in his cheeks turned to ashes:

"Ten dinners, at 600 reis, 6,000 reis! Ruin and desolation!"

"Twenty-five cigars, at 100 reis, 2,500 reis! Oh, my sainted mother!"

"Eleven bottles of wine, at 1,200 reis, 13,200 reis! Be with us all!"

"TOTAL, TWENTY-ONE THOUSAND SEVEN HUNDRED REIS! The suffering Moses! There ain't money enough in the ship to pay that bill! Go — leave me to my misery, boys,

I am a ruined community."

I think it was the blankest-looking party I ever saw. Nobody could say a word. It was as if every soul had been stricken dumb. Wine glasses descended slowly to the table, their contents untasted. Cigars dropped unnoticed from nerveless fingers. Each man sought his neighbor's eye, but found in it no ray of hope, no encouragement. At last the fearful silence was broken. The shadow of a desperate resolve settled upon Blucher's countenance like a cloud, and he rose up and said:

"Landlord, this is a low, mean swindle, and I'll never, never stand it. Here's hundred and fifty dollars, sir, and it's all you'll get — I'll swim in blood before I'll pay a cent more."

Our spirits rose and the landlord's fell — at least we thought so; he was confused, at any rate, notwithstanding he had not understood a word that had been said. He glanced from the little pile of gold pieces to Blucher several times and then went out. He must have visited an American, for when he returned, he brought back his bill translated into a language that a Christian could understand — thus:

10 dinners, 6,000 reis, or	$6.00
25 cigars, 2,500 reis, or	2.50
11 bottles wine, 13,200 reis, or	13.20

Total 21,700 reis, or $21.70

Happiness reigned once more in Blucher's dinner party. More refreshments were ordered.

このように隠しだてしない精神で率直に披瀝された見聞から、パリの洗練された美しさやルーヴル美術館やヴェルサイユ宮殿やブローニュの森に対するマーク・トゥウェインの感動が本物だと共感できる。パリから汽車に乗ればアメリカでは無味乾燥な旅行が目新しい風物や物珍しい車外の風景のために楽しく快いものだと認めている。客室が個室になっているのはよいが自由に飲食もできないし窮屈だともいう。また身体を自由に伸ばせる寝台車もないと嘆いている。その反面まるで時計のように規則正しく、乗務員の礼儀正しいこと、事故が少ないことをほめている。彼は偏見のない率直さで常識として喧伝され定着した知識がいかにまちがっているか容赦なく明るみに出してゆく。異文化間の接触では偏見を捨て真実を探ることが理解への前提であることを思えば彼の姿勢が正しいことがわかる。パリの理容院がかゆいところに手がとどく客扱いをするに違いないという先入観とは大違いで、儲けるためには臨時にでも理髪師になって下手なカミソリさばきで客の顔をそり、切り傷をこしらえたり、優雅で愛嬌たっぷりだという美しいパリの「おしゃれ店員」に接してみれば案に相違して彼女たちは「質素で手足が大きく口が大きく、口ひげをはやしていて身体の格好は悪く愛嬌もないごく普通の平凡なパリ娘」であったり、数千年の歴史と伝統をもつイエルサレムの街が先入観とは異なるわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com